

Pierre Seghers :
La Résistance et ses poètes

安藤玲子

著者ピエール・セゲルス自身詩人であり、『今日の詩人達』の出版者として、フランス詩の愛好者に親しまれているのは勿論、第二次世界大戦中に、ルイ・マストの偽名で対独抵抗の詩を書き、南仏の一小村で輝かしい詩集出版活動を行ない、『フォンテーヌ』誌のアルジュと並んで『ポエジー』誌のヴィルヌーヴ・レ・ザヴィニョンを歴史の頁に刻んだ行動の人であることもよく知られている。

ナチス・ドイツの崩壊後30余年をへて、一見遠退いた過去を再現するのをためらう気持があったにもかかわらず、セゲルスが本書を世に問うのは、これがかつての魂の仲間たちに捧げる鎮魂歌であると同時に、いやそれにもまして、去り行く世代が戦争を知らない世代に贈る証言としてであろう。セゲルスはその序文で次のように語る。「この本を書くまで、私は長い間躊躇していました。30年という年月。しかし、この時を隔ててみて、あの日毎に生きられた事柄を証言するのは、おそらく役立つであろうと今日では信じています。《出来事は流れ去り、それを見た眼は閉じる。受け継がれなかった火の如く、伝承は年月とともに消滅する。その後になって一体誰がこれらの世紀に入り込むことができようか?》これまでにレジスタンスの詩人たちの道程を辿り、彼等をまとめ、その詩作の全体像を歴史に加えようとする誰が企てたのだろうか? 複雑な網の迷路を飛びかう偽名、牢獄からマキ、リヨンからアルジュ、強制収容所

から地下抵抗運動、人類博物館から『詩40~44』へと、この30年来、誰がその源泉に、その諸動機に廻り、この時代を蘇らせたであろうか? 一見驚くべきことながら、答は否である。』数多いレジスタンスの歴史的研究がすでになされ、他方、アラゴン、エリュアール、ピエール・エマニュエル、デスノスの如き詩人たちの詩集は常に愛読者の数を増し続けているが、セゲルスは詩を歴史の日々に織り込むことで、あの暗澹たる年月、屈辱と怒りのなかで、断固とした現状拒否と未来への信頼のみが人間を支えた時代を手渡してくれるのだ。

詩選集に先立つ約400頁で、読者は「紙上での会話」と歴史との係わり合いに立ちあうことになる。スペイン戦争が迫りくる暗雲を予告する1936年から、ナチス・ドイツの降伏により、レジスタンスの歴史にも幕が引かれる1945年5月8日に至る時期が、ほぼ年代順に11章から構成され、その中心に、リヨン、ヴィルヌーヴで主として活動したセゲルスの明晰な思考と人間味あふれる視点が据えられる。

敗戦の衝撃、それぞれが孤立した地帯に二分されたフランス。無気力、無関心、日和見主義、対独協力があまねく拡がるなかで、ごく少数が「跪いて生きる」ことに否を唱え、個別の意識が手探りで連帯を求め、自発的な行為を生みだしていく。次いで日ましに凄惨となるナチの弾圧のもとで、あらゆる地平線から「天を信じるものも信じないものも」、人間の尊厳に対して加えられた犯罪に抵抗する共通の闘争に参加するため結集する。ピラ、小冊子、詩集、雑誌、新聞と、あらゆる形式の文書は、あるものは謄写版刷りで、あるものは密かに地下印刷され、あるいは密輸入されて、外套の下で手渡され、捕われたフランスに情報と微かな希望をもたらしたのだった。これら息づまる日々を、セゲルスは証言、裁

判記録、日記、手紙等、厩大な資料を援用しつつ裏づけている。聞く知識人たちの大胆不敵な行動が語られるのは当然だが、著者の視線は寡黙な、しかし真の選ばれた人たち、あの『両替橋の夜番』たるデスノスが夜明けに呼びかけた植字工、印刷工、爆弾運搬人、線路のビス外し屋、火つけ人、ピラくばり、密輸入にもひとしく向けられる。この立場は後半の詩の選択にも貫かれている。アラゴン、エリュアール、エマニュエル、ジャン・ケロール、ジャン・カソーなど著名な詩人たちに交じって、作者不明の詩、偽名の謎がいまだ解明されない人の詩、加うるに俘虜の、強制収容所抑留者など素人の詩が、数多くの詩人達の作品と並んで『詩人の榮譽』を、不当にも断ち切られた存在の証を与えられている。例えば、マックス・ジャコブの詩『ルポルタージュ 1940年6月』の横では、ダッハウ収容所が唯一の身分証明となったジャック・ミッシェルなる人物の詩『旅』が死の列車の不吉な響きを伝えるのである。

この受難の5年間、紙も印刷インキも不足し、信頼できる印刷屋を見つけることも容易ではなかった時期に、地下に潜行した詩は、自由という松明の火を象徴的にかかげ続ける大任を果すことになった。心ある人に働きかけ、連帯の絆を強め、訣別の詩は「歌う明日」への希望に支えられてのみ意味を持ち得た。幸福な少数のためではなく、聞くすべての兄弟と心を通わせるべく書かれた詩であった。最も高貴な意味を与えられたうえでの「状況の詩」は、戦争が終るか終らぬうちに、詩を政治的行為、功利的目的のために使うことで、詩を裏切るものとして、『詩人の不名誉』と、まずベレの仮借ない攻撃を受けたが、何物も失う必要のなかった海の彼方からきた場違いの非難を著者は全く受けつけていない。

「状況の詩」の擁護にエッケルマンの『ゲーテとの対話』が引用されるのはすでに月並み

となったが、ジャン・ポーランやクロード・モルガンと共にアンスの偽名で『レットル・フランセーズ』を支えたエディット・トマの言葉に耳を傾けよう。家畜運搬用貨車から子供の痩せ細った手が振られるのを見たトマはこう断言する。「このあとで、芸術には祖国がないといえようか？ 芸術家は象牙の塔にこもり、自己の仕事に専念すべきと言うのか？ 仕事の名に値するのは、真実を告げること。真実とは、胸につけられた星、母親から奪い去られる子供達、連日銃殺される男達、一定の人たちから組織的に人間の品位を剝奪すること。秋のかぐわしき？ それは真実ではない。あなたがそれを味わうのを許してくれる希望から切り離して、秋のかぐわしさを語るなら、それは虚偽である。いやもっと悪い。それは真実を隠蔽し、犯罪をごまかし、犯罪人を保護する煙幕であり、犯罪の共犯となるのだ。」悪が人間の尊厳を脅やかす時、精神の純潔を維持するには、この悪を告発する逆行行為が唯一の納得できる行動ではなかったろうか？ ヴェルコールが『沈黙のたたかい』のなかで、「自分の昔の仲間の詩人たちが、黄色の星の地獄で焼かれ、拷問をうけ、射殺され、ガス室送りにされる瞬間、詩人たちがそれでも世俗に超然たるむかしの詩に忠実なら、それこそ人非人というものだ。人類全体の裏切者となるより、芸術の裏切者になるほうがましだ」と言い放つ時、共通の闘いに参加した作家たちの信念は一致するのである。歴史の外にあった人間の言葉は空しい響きしか持ち得ない。「人間が人間によって打ち砕かれ、皆が空腹で、さまよい、身を隠し、絶望する時、禍がふりかかる時、『状況』は詩人をして、画家をして——私はゴヤ、ドラクロワ、ジェリコ、ピカソやまだ多くの人たちのことを考えるのだが——それらの出来事を炎で永遠に書きとどめる見者にする」と、セゲルスは考えている。しかし、抵抗運動初期、巨大なナ

チスの力の前で、抵抗の詩は「闇の中のケンケ燈、四方から吹きつける風に揺らぐ洞窟内の小さな焔であり、公園や魔法の庭の中ではなく、猛獣のひそむ密林での歩みであった。」それ故に詩は歴史との絶えざる交錯の中で捉えられる必要があるのだ。セゲルスは続ける。「何人かの批評家はいうだろう。《これらすべてを通して、何か新しいものを、真の詩人を発見したのですか?》私はこう答えよう。《私は、再度、人間を見出したのです》と。それに、あなたがたにとって《真》の詩人とは何なのですか?」人間の魂に危険が迫る時、耽美家のため真珠を糸につなぐ人ではあるまい。抵抗の詩は文学者の作品である前に、人間の奥深いところから迸る叫びであった。「再び十字架につけられ、火刑台に縛られ、車責めの刑に処された人間を護るため、詩人達は相まみえるのだ。歴史を負うて、詩はもはや何かの上に憩うものではなく、泥沼の時代にあって、魂の参加であり、外的事件と詩人の創造力との呼応、調和なのだ…この意識と言葉の跳躍、自由な人間を護る決意、これらがなければ、フランス詩は欠けたものとなったであろう…この本は、従って、愛国の詩を讃美するものでも、鼓笛隊の行進でもない。指揮下の軍隊をより迅速に歩ませるため、ナポレオンがスペインから詩人たちに注文した軍歌とは何の係わりもない。どうか混同しないでもらいたい。この本は深淵から響く一つの歌の歴史にすぎない。一つの内省、一つの証言です。5年の間、肉にくいこみ、われわれの生命を危く奪いそうになった傷の物語です。私の本を読んでくれる若い人たちよ、このことを考えてください。火刑台の火は決して消えてはいない、あなたたちの足下で再び燃え上がるかも知れない。私がかこれら回想をまとめている現在、あちこちの炉は再び赤く焼けてきているのです。これは歴史書ではなく、生きた証言の本です。最も暗い時代のロ

マンセロ、このなかにあなたたちが又もや投げこまれるかも知れないのです。よく聴き、視ておきなさい。そして覚えていて欲しいのです。」

昔の狂気が蘇らない保証はどこにもない。受けた傷の深さに比して忘却はあまりにも速やかに訪れる。主として占領地帯とバリを舞台とした『深夜叢書』の歴史を語るヴェルコーの『沈黙のたたかい』、今年3月に再版された『フォンテーヌ』誌の特別号とあわせて、本書は、多くの人びとが生命を賭けて護り続けたフランスの精神的生命が、普遍的価値を与えられることで高揚された、全人類の魂の記録として、注意深く読まれる必要があるのではなからうか。 1979年9月

Pierre Seghers: *La Résistance et ses poètes*. Tome I, France 1940-1944, 335 pp. Tome II, France 1944-1945/Choix de poèmes, 333 pp. Les Nouvelles Editions Marabout, Verviers (Belgiques), 1978.

Brigid Brophy: *Beardsley and his world* 管見

河村 錠一郎

アメリカの才女ソンググに対しイギリスには才媛ブローフィがいる。日本へは小説家として、『雪の舞踏会』(*The Snow Ball*, 1964)が翻訳紹介されたが、彼女には小説の他に文学研究、批評、評伝の類がかなりある。ピア